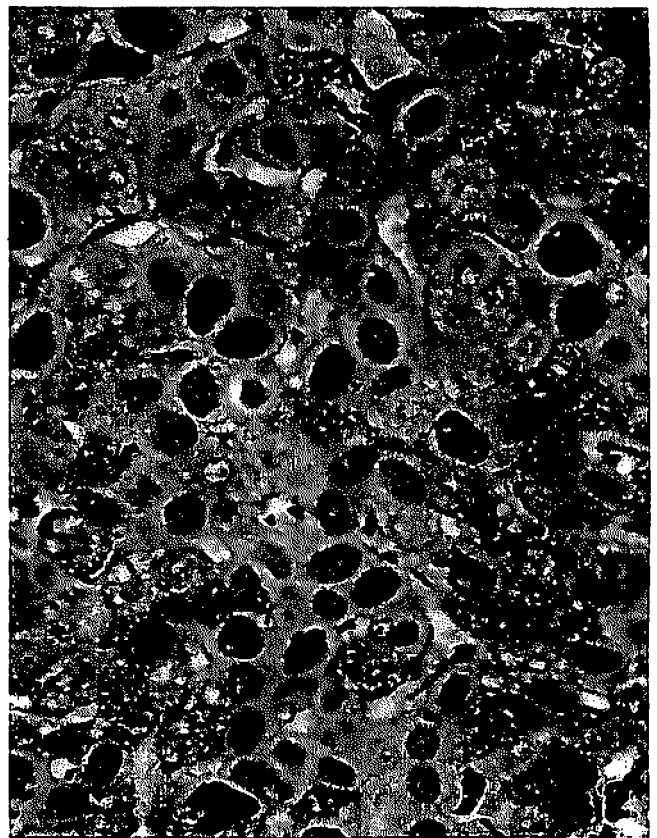
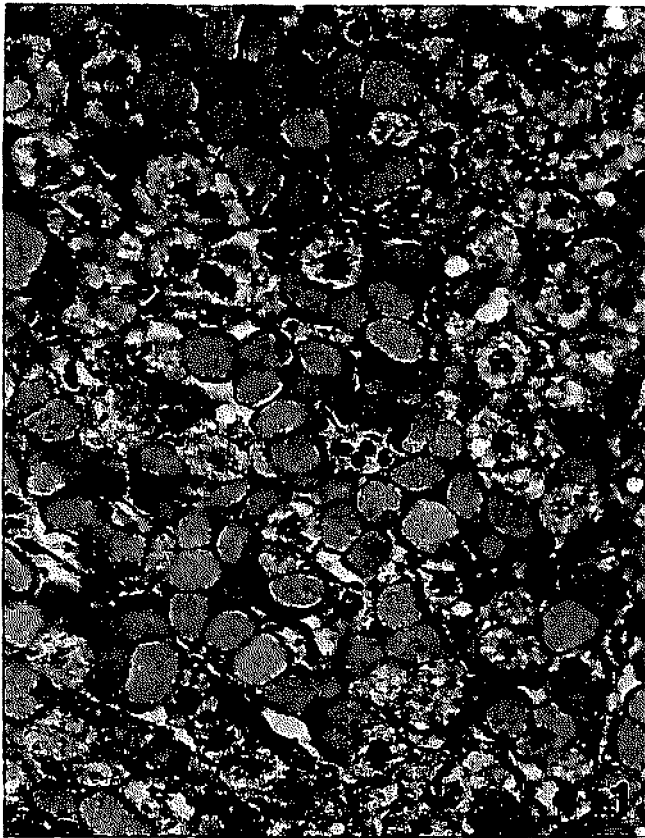


牛の肝臓

帯広食肉検査所・帯広畜産大学家畜病理学教室出題 第27回獣医病理学研修会標本No.472



動物：牛，ホルスタイン，雌，8才，北海道釧路産。

臨床的事項及び肉眼所見：昭和61年4月15日健康畜として帯広食肉検査所に搬入された。肉眼検査時，肝表面に米粒大白色斑が散在したため材料採取された。

組織学的所見：肉眼所見として記載された白色斑は標本作成時のミスで提出標本には出現しておらず，また提出意図の病変とはかかわりはないものと思われた。

提出標本のほぼ全ての領域の肝細胞の細胞質内に単一のスリガラス様封入物が観察された(写真1, HE染色)。この部位は概ね弱好塩基性であり屢々中に好酸性顆粒物を容れて観察された。この領域はPAS染色に対して強陽性を示した(写真2, PAS染色)。α-アミラーゼ消化後のPAS染色では概ね消化されたが完全なものではなかった。またペクチナーゼ処理後のPAS染色においても染色性の減退はみられたが完全には消化されなかった。コロイド鉄染色には強陽性であり，アルシアンブルー染

色に対しても陽性であった。ビクトリアブルー染色に対しては陰性であった。ホルマリン固定材料よりの電子顕微鏡観察においてスリガラス様領域の周囲に限界膜は存在しておらず，約10nmの分枝したフィラメント様構造物が認められた。以上のスリガラス様領域に対する染色性および電顕的所見はポリグルコサン小体に一致するものと思われた。

組織学的診断及びまとめ：ポリグルコサン小体を多数認める牛の肝。ポリグルコサン小体は従来Lafora bodyといわれていたもので，ヒトではラフォラ病に際して脳，肝，心，筋肉等に出現するものとされている。一方犬では加齢と共に脳及び消化管平滑筋に出現することが報告されている。本提出例は肝のみしか検索されていないことおよび1例のみであるため意義は不明であるが，牛にもこのような例があることを明記し，今後の検索に役立ててもらえれば幸いである。